

令和 6 年 6 月の解説（週間天気予報）

【6 月の天候状況】

上旬は、偏西風が南に蛇行して流れるとともに、日本の南で太平洋高気圧の勢力が弱かったため、梅雨前線が日本の南で停滞した。また、東・西日本を中心に冷涼な高気圧に覆われることが多かった。このため、旬平均気温は西日本と沖縄・奄美で低く、旬間日照時間は東・西日本日本海側と東・西日本太平洋側で多かった一方、沖縄・奄美で少なかった。期間の終わりには、日本の南での太平洋高気圧の強まりとともに、梅雨前線が華中から四国の南にかけて停滞し、前線上の低気圧の影響などで沖縄・奄美、九州南部や四国では大雨となった所があった。九州南部では 8 日頃、四国地方では 9 日頃に梅雨入りした（速報値）。

中旬は、梅雨前線が南西諸島付近に停滞することが多かったため、沖縄・奄美では旬降水量がかなり多く、旬間日照時間がかなり少なかった。一方、この時期としては移動性高気圧が本州付近を覆うことが多かったため、北日本太平洋側と東日本日本海側で旬降水量がかなり少なく、東・西日本日本海側と北・東日本太平洋側で旬間日照時間がかなり多かった。東日本日本海側の旬間日照時間平年比は 193%で、1961 年の統計開始以降、6 月中旬として 1 位の多照となった。九州北部地方では 17 日頃に梅雨入りし、沖縄地方では 20 日頃に梅雨明けした（速報値）。北・東・西日本では晴れて暖かい空気に覆われやすかったとともに、低気圧が中国東北區からサハリン付近を通過することが多く、北日本を中心に暖かい空気が流れ込みやすかったため、旬平均気温は北・東・西日本でかなり高く、北日本の旬平均気温平年差は+3.5℃で、1946 年の統計開始以降、6 月中旬として 1 位の高温となった。

下旬は、梅雨前線が本州付近に停滞することが多く、特に 21 日は鹿児島県で、28 日は静岡県で線状降水帯が発生するなど、梅雨前線の活動が活発となり、東・西日本太平洋側を中心に大雨となった。旬降水量は東日本太平洋側でかなり多く、東・西日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。旬間日照時間は西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり少なかった。北日本では前半は低気圧の影響を受けやすく、旬降水量は北日本日本海側で多くなったが、後半は低気圧の影響を受けにくく晴れの日が多かったことから、旬間日照時間は北日本太平洋側で多かった。沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われて晴れることが多く、旬降水量は少なく、旬間日照時間はかなり多かった。関東甲信地方、東海地方、近畿地方では 21 日頃、北陸地方、中国地方では 22 日頃、東北北部と東北南部では 23 日頃に梅雨入りし、奄美地方では 23 日頃に梅雨明けした（速報値）。北日本では暖かい空気が流れ込みやすく、東・西日本と沖縄・奄美では暖かい空気に覆われやすかったため、旬平均気温は北日本と沖縄・奄美でかなり高く、東・西日本で高かった。特に、太平洋高気圧に覆われやすかった沖縄・奄美の旬平均気温平年差は+1.3℃で、1946 年の統計開始以降、6 月下旬として 1 位の高温となった。

【6 月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率(3～7 日目平均)は、例年値(注)よりも 5 ポイント高い 70%となった。地方別の適中率では、東北、北陸、九州地方で例年値を大きく上回った。最高気温の予報誤差(2～7 日目平均)は、全国平均で例年値よりも 0.1℃大きい 2.7℃で、例年値よりも北海道や沖縄で小さく、北陸や近畿で期間の中ごろに大きくなった。また、最低気温の予報誤差(2～7 日目平均)は、全国平均で例年値と同じで、九州南部や沖縄で例年値よりも小

さくなくなった他、東北や北陸で例年値よりも大きくなった。

(注) 例年値は気象庁HP(予報精度検証)内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【8月の週間天気予報の利用にあたって】

8月は年間を通して最も気温が高くなり、真夏日(日最高気温が30℃以上の日)が最も多く、猛暑日(日最高気温が35℃以上の日)となることもあります。熱中症対策の情報として、翌日又は当日の暑さ指数(WBGT:湿球黒球温度)が33以上になることが予測される場合に「熱中症警戒アラート」が発表されます。これらの情報とあわせて、週間天気予報や2週間気温予報に記載される最高気温予報も参照し、熱中症予防など健康管理に活用ください。また、平年では台風の接近数が9月と並んで最も多く、また積乱雲が発達して急な雷雨や短時間強雨が起りやすい時期でもありますので、最新の週間天気予報等でご確認ください。